

死後の体験に共通していえることは、自分自身があからさまになる感覚である、ということに思い至りました。つまり、我々人間は、いろいろな仮面のもとに、日々生活しています。我々は、財力や権力で心の平安を得ようとしています。また、階級、受けた教育、肌の色、財産、権力、肉体の美しさ、男女の性別等々で、自分是他の人より上なのだと考えがちです。我々は肉体を洋服で飾る一方、心の奥底で考えていることや、ある行動を他人に知られないよう、他人の眼にふれないように隠したりします。

しかしながら、死後の世界では、こういうことは一切無駄なようです。死の瞬間には、覆いはすべてはがされ、突如として、自分ばかりか、他者のあらゆる思考、行動が、天然色の立体映像で映し出されるのです。他者の靈魂に出会った時には、彼らにも自分の考えていることが分るし、自分も彼らのあらゆることが手にとるように分るのです。ここではコミュニケーションに言葉は用いられず、むしろ考えていることが直接理解されるのです。それゆえ、一人の男性の言葉を借りると、「考え方の違う者同士ではとてもいられない」というほど、自分があからさまになるのです。もう肉体はないのですから当然のことですが、肉体の美しさや、肌の色は、もはや誇るものではありません。今や見える唯一の美しさは、身体とはまったく無関係の、魂のそれです。「死」の状

態にいる間は、ほとんどの体験者が男性女性の区別を特に感じなかったと言っているように、性別まで消えてしまいます。それゆえ、この時に、精神そのものともいえる、愛と真理のみが浮び上ってくるのは、当然といえます。

話をもとにもどして、立体映像のもう一つの特徴は、過去の自分の行動ばかりか、その行動が他人に及ぼした影響までもが映し出されることです。一人の男性がこの点を次のように言い表わしています。

——私は自分の肉体を脱け出して、病院の真上にいました。そこから自分の身体が横たわっているのを見ていました。すると、光が——光だけが——私の回りをとり囲んでいるのに気付きました。すると、私のぐるりに映像が出て、私の人生のすべてが回想的に写し出されました。自分がやってきたことは恥かしいことばかりで、穴があつたら入りたいくらいでした。というのは私の考え方そのものに誤りがあつたようなのです。光は何が誤りか、私が誤りをしたか、非常にリアルに映し出すのです。

これをフラッシュ・バック、記憶、何と呼んでもいいのですが、この映像の目的は自分の全生涯を確認することで、まるで審判を受けているようでした。光がぼやけると、対話があるのです。もちろん言葉を用いる対話ではありません。そして、過去の出来事を確認する時、私を導き、助け

てくれた万能の眼がありました。

このことは大変印象に残っています。この眼を通して映像を見たのですが、この眼は私がしてきたことばかりでなく、それが他の人に及ぼした結果まで見せるのです。見せるといっても映画の画面を見るのとは違って、すべてを感じるのです。特に万能の眼の助けがあるので、人が考えていることも、手に取るように分るのです。ありとあらゆる人の胸のうちがです……。

これは、非常に居心地の悪い状態に違いありません。それゆえ、その後の自分の生き方を変えようと決意して死後の世界から戻ってきた人がかなりいるのは、不思議ではありません。ここに、二人の男性のインタビューの一部を抜粋してみます。

① 私は、自分の体験を誰にも話しませんでした。しかし、私が生き返ってから、他人のために何かをしたいという、抗しがたい、燃えるような欲求が生まれました……自分のこれまでの人生が恥かしくてたまりませんでした。他人のためになんかをしなくてはならない、それもすぐという思いにつきあげられました。

② 私は生き返った時、自分は生れ変わるのだと決心しました。それまでの人生に後悔の念でいっぱいでした。もっと満足 of いく、よりよい人生を送りたくなったのです。